

# ローカル情報をアカデミアにつなぐ

東京農業大学生物産業学部（オホーツクキャンパス）

宇仁 義和

## これまでの経歴

1967 年 3 月京都市生まれ、京都府立朱雀高等学校卒業まで北野天満宮の近く上京区に住んでいました。1985 年に北海道大学理 3 系に入学、移行点の点数が最低レベルで薬学部に進学しました。しかし、そもそもは移行定員 2 名の文学部行動科学科に行こうと思っていたので、教育社会学講座を目指して教育学部に転部しました。転部で 1 年ダブリ、わざと 4 年生を 2 回して 6 年掛けて卒業。我ながら馬鹿です。卒業後は環境教育で何かしようと大学院に進学するも、1 年目の 9 月から標津サーモン科学館で飼育担当の臨時職員を 3 か月、続いて斜里町立知床博物館臨時職員を年度末まで務めました。そして、そのまま斜里町に選考採用で就職し、1992 年 4 月から役場職員となりました。最初は総務部企画課企画係兼広報広聴係でしたが、学生時代に取り損ねた学芸員資格を試験で得た半年後の 1995 年 10 月には、晴れて斜里町立知床博物館に異動しました。ただし発令は庶務係兼学芸係で事務（といってもいろいろあるのですが）でした。博物館の仕事は 7 年半で終わり、2003 年 4 月には保健福祉部保健課高齢者福祉係で介護保健を担当することになりました。しかし、その仕事にはやりがいを感じられず、何より環境行政のラインから外れたと感じたので、12 月で役場を辞めてしまいました。翌月 2004 年 1 月からは独立学芸員を名乗って個人事業主となりました。そして、2006 年 4 月に現在の東京農業大学生物産業学部の嘱託助教授（2007 年 4 月からは嘱託准教授）として採用され、博士号取得 1 年後の 2021 年 4 月から専任の教授となりました。専任になってからは自然資源経営学科の教員も兼ねています。

## 就活でアピールしたポイント、職の探し方や選び方

就職活動はしていません。バブル世代で、当時は定職に就かない「ブー太郎」が自由な生き方として持て囃された時代でした。2 回目の 4 年生の時、北海道自然保護連合という団体の事務局次長をしていて、ちゃんとした環境団体を作って専従になるのかとか妄想していたくらいでした。ちなみに、この団体は 1987 年 4 月に行なわれた知床国立公園内の国有林伐採に対して、前年に反対運動が全国規模で発生したときの中心です。事実と理論とは逆に声の大きさと政治力が物を言う業界だったので、科学も理解できる環境団体を目指そうかと考えていました。そのうちに、自然保護連合に関係していた北海道大学大学院環境科学研究科（現在の環境科学院）の院生が、斜里町委託研究「大型鳥獣の生態研究とその成果の自然教育への応用」の話を持ってきてくれたのです。生態研究のメンバーは知床財団（当時は自然トピアしれとこ管理財団）の山中正実研究員、北海道大学歯学部鈴木正嗣助手（現・岐阜大学）、北海道大学農学部大学院の矢部恒晶さん（現・森林総合研究所）が進めていました。そこへ、教育学部だから自然教育部分を担当しないかと誘われ、これが運命の分かれ目でした。実際にやったのは、シカの観察会と知床自然センターの映像ホールに投影する解説スライドの作成でした。観察会は、春秋はワンボックスカーを使った「黄昏にシカを見る会」、夏はライトセンサスを応用した「夜の動物ウォッチング」、冬はクロスカントリースキーを履いて越冬地の観察でした。これらはすべて数百円ですが有料のプログラム。それでもかなり人が集まりました。観光ギツネが話題だった頃で、キツネは簡単に見られるが、シカはなかなか見られないという時代だったのです。

それらの活動に加えて、知床自然センターや「知床自然教室」のアルバイトをして、大学生時

代のかかなりの時間をウトロで過ごしていました。そうこうしているうちに、斜里町の職員の人から「ウチで働かないか」と誘われたのです。十分に人となりを見る時間があり、最後の使用期間が知床博物館での臨時職員ということだったのでしょう。古き良き時代の話です。今の言葉でいえば、インターンを2年近く続けたことになるのでしょうか。

### 学生時代にがんばっていたこと

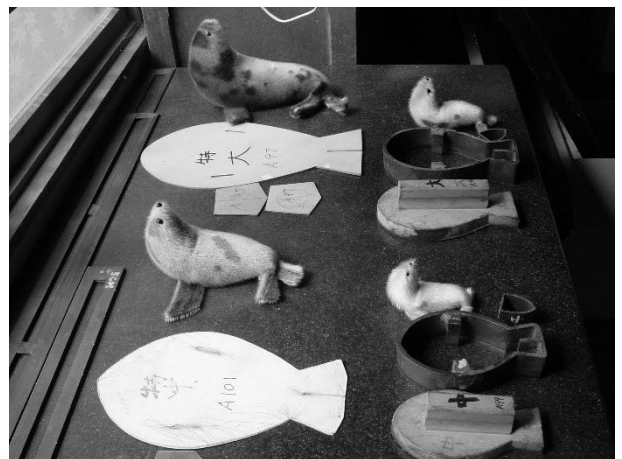
これは転部までして学びにいった社会学の勉強です。ただ、転部した先の教育学部の講座がゴリゴリのマルクス主義で、学部の教員の多くは特定の政党の党員で思考思想が決っているし、指導教員は外国語ができない。そのうち嫌になって、図書館や研究室の本を読むだけの日々でした。図書館にはかなり通い詰めたので、学部生では例外的に図書館本館の書庫に出入りすることを許されたのはうれしかったです。

それと、先に書いた北海道自然保護連合の事務局です。連合というのは団体の連合で、自らの活動は基本無く、構成団体の支援と札幌でのメディア発表、機関誌の編集発行がおもな仕事でした。道庁記者クラブに資料の投げ込みとか、時には記者会見とか、連合の名前で自分の興味関心の質問を関連部局にするとかしていました。質問される職員からすれば迷惑な存在ですが、それでも暖かく迎え入れてくれる人もいて、じっくり話をしてもらえた経験もありました。古き良き時代の話です。

### 現在の仕事内容と、海生哺乳類の関わりについて

現在の仕事内容は、博物館の専門職員と学芸員養成課程の教員です。仕事は法定科目の授業だけで、卒論指導など専門教育はしていません。気楽で研究時間が得られる反面、学生とのつながりが薄く、専門分野の後継者育成ができないのは寂しいですね。

海生哺乳類への関心は、利用の歴史を明らかに／公にすること。なんとなく伝わっているアザラシ猟業とか毛皮の土産品について、具体的なところを調べようというのが始まりです(写真1)。アザラシ毛皮産業の報告にこぎ着けたのは2009年と遅く、捕鯨については2015年頃からでした。戦前の沿岸捕鯨の事業展開を企業文書から記述し、紀伊大島と鮎川、そして朝鮮南部の蔚山[うるさん]で捕獲個体の調査をしたアメリカ人研究者ロイ・チャップマン・アンドリュースを追いかけて、捕鯨船とノルウェー人砲手のリストを作り活躍年代を明確にしました。派生的には、鯨骨鳥居は鯨骨アーチをアレンジしたものであることと、伝統的といわれる鯨料理も大半は近代の産物であることを結論づけました。これらをまとめて博士論文にし、学位を得たのが2020年、50代になってからでした。



捕鯨で博士を取ろうと思ったのは、ノルウェーに行ったことがきっかけでした。戦前の沿岸捕鯨など誰も興味を持たない分野で、発表しても「はーそーですか」くらいの反応しか得られません。ところがノルウェーの捕鯨博物館で、何故かノルウェー人を前にノルウェー人砲手撮影の秘蔵写真のプレゼンをすることになり、

写真1. (株)遠軽毛皮が使用していた切断用型板と打ち抜き型。製品は北海道のみやげ品「ミニアザラシ」の名称で販売された。オホーツク海産の毛皮も用いられたが、写真の製品はタテゴトアザラシ製。この模様の状態を毛皮業界ではタテゴトアザラシでも「ゴマフ」と呼ぶ。斜里町立知床博物館蔵。

そこで日本の捕鯨基地の図面と写真を見せると具体的な突っ込みを受けました。鯨油採取にはその煙突では細すぎる、とか。それに対して、自分もちょっと力んで反論するとか、初めて議論ができました。そこで、じゃあこれで博士論文を書いたらと言われてその気になりました。自分が追いつけているテーマに関して議論できる相手が現れることはやる気につながるし、本当に大切だと思います。

仕事で海生哺乳類と関わったのは、ストランディング対応が最初でした。斜里町立知床博物館に勤めていた1996年6月にミンククジラが漂着したという情報が入り、ボランティアを募って網走の捕鯨業者の協力を得て全身骨格を収集したことが始まりです。これは知床博物館で初めてのクジラの全身骨格標本となり、現在も展示されています。大包丁で肩甲骨を見事に切り離す様子を見て痺れました。その後も漂着が現れ、今で言うストランディング対応のまねごとをしていました。オホーツク海側で初めてのオウギハクジラを回収したり、真冬に河口から100 m以上上流でツチクジラのDNA試料を採取したりしました。過去の記録の見直しもしました。博物館の出版物を見るとアカボウクジラがあり、怪しいと思って別の写真を見るとオウギハクジラだったり、戦前の文献に写るツチクジラをオウギハクジラ属と同定し直したこともあります。まだオウギハクジラが「謎のクジラ」と言われていた頃で、国立科学博物館の山田格室長が中心となり、日本海セトロロジー研究グループ（現在の日本セトロロジー研究会）がオウギハクジラの標本を収集していた頃です。やっていたのは研究にはほど遠い事実収集ですが、「日本動物大百科第2巻哺乳類2」（平凡社1996:56）に掲載されたオウギハクジラの漂着場所を大きく拡張する作業でした。

ストランディング対応で大きな出来事は2005年2月に羅臼町相泊で発生した流氷によるシャチの集団座礁でしょう。この時は役場を辞めてフリーだったのですが、羅臼までのこの出掛け、町役場に行って廃棄物として捨ててしまわずに研究材料に使わしてほしいと交渉をしました。法的根拠も何の資格も無いなかで、無謀な行動です。しかし、廃棄物担当の環境課長は山仲間であまあ知っている仲だったからか、とても好意的に対応してくれたのです。ちょうど世界遺産に登録されるという年だったので、荒っぽい漁師町の羅臼町といえども科学や自然、環境への態度に変化があり、羅臼の町や役場内部にもそういう空気が生まれていたのです。結果、岸近くで死んだ全個体が回収され、環境課が所管する堆肥場施設で調査ができました。回収作業は地元の漁師が船を出し、ダイビング作業は羅臼の関勝則さんと小樽の海洋探査株式会社の鈴木芳房さんが請け負い、相泊から解剖場所まで鯨を運んだ運送会社は、今は観察船「はまなす」を運航しています。羅臼の観察船事情にも影響を与えたできごとになりました。

## 自身の人生において、転機になった出来事や心境の変化

一番の転機は、1990年頃に斜里町との縁ができたことです。その結果が知床博物館での仕事や海生哺乳類との関わりで現在に至ります。

研究コミュニティに出入りすることになったのは、2002年10月に蔚山で開催されたコククジラのワークショップに参加したことがきっかけでした。科博の山田格室長から誘いを受け、粕谷俊雄博士と連名の作業文書を発表したのです。短い文書ながら英語での発表は初めて、しかもあの粕谷先生との共著という機会を得たのは大きな転機でした。NOAAのロバート・ブラウネル博士ともそこで知り合い、現在に至るまで交流が続いています。発表した内容は、1996年に北海道南部日本海側の寿都町〔すつつちょう〕に漂着したコククジラの報告、そして明治時代に北海道北部日本海側の天塩〔てしお〕で捕獲されたコククジラの記録です。この2つに加え、その他の捕獲や漂着の記録からコククジラの日本列島日本海沿岸の回遊経路の現存を主張するものでした。寿都の鯨はすでにIWCで報告されていたのですが、骨格を知床博物館が譲り受けて標本化したことで発表の資格を得たのでしょう。ワークショップの趣旨からすれば、何でもしゃべる水産庁

以外の報告者が欲しかったのだと思っています。天塩の捕獲は道内の郷土史研究者には知られた記録で、そのことを記した本もありますが、そういった地方の記録はアカデミアではなかなか把握されないでしょう。自分の役割は辺地の記録を研究コミュニティにつなげることだと自覚しました。

天塩の捕獲記録には巨頭「ごんどう」が複数年現れます。礼文島では千年前の遺跡からヒレナガゴンドウの頭骨が見つかっています。現状、道北にはコビレゴンドウが回遊しないので、もしかしたら天塩の捕獲記録にある巨頭「ごんどう」はヒレナガゴンドウの生き残りだったのかも知れません。礼文島の頭骨をヒレナガと結論したのは粕谷博士ですので、天塩の記録がことさら興味深かったのかも知れません。粕谷博士には 2003 年に名護博物館の紀要に書いたジュゴンの捕獲記録でも原稿を見てもらい、断片的なデータから限界まで考察することを教えられ、博士論文では副査を務めていただきました。これは自分にとって大きな誇りとなっています。

ちなみに粕谷博士は自分の父親より 2 歳年下の同年代、ブラウネル博士は母親と同年。親と一緒に仕事をしているつもりでいます。

### アカデミアでポストをとるコツ

今の仕事を呼び寄せたのは、斜里町役場を辞めた時の挨拶状でした。町職員辞めました、いちおう個人事業主です、仕事ください、という内容の挨拶状をいろいろな人に出したのですが、そのうちの 1 通が現職場（東京農業大学）の図書館の人宛てでした。ここは町職員時代からときどき利用していて、職員の人とも顔見知りになっていたのです。挨拶状の返事が、たぶんメールで来て、「世田谷キャンパスに新しく博物館ができる。そこで学部の展示をするのでその相談役をやるか」というものでした。初めての仕事で、たしか 10 万円で受けたと思います。そして、展示の準備（といっても会議が主体でしたが）を始めて 2 か月たった 6 月、今度は学部長から、「学芸員課程を作るのだが、その担当教員をやるか」と誘いが来たのです。常勤ではあるが嘱託助教授、仕事半分、給料半分の待遇だけどどうかと。自分で仕事を作りたいかったので、嘱託はちょうどよいポジションでした。口約束ではあったけれども、安定した仕事の話が前職を辞めてたった半年でやってきたのです。これは本当に渡りに船でした。実際の採用は斜里町役場を辞めて 2 年後、そこから専任教員までが 15 年でした。こんなに時間が掛かったのは、別の仕事もしたかったし、家庭の都合で嘱託がちょうどよかったこと、そして業績不足と学位無しが原因です。子どもが 2 人いたのに仕事を辞めることができたのは、連れ合いがフルタイムの正職員で 1 馬力分の稼ぎがあったからです。人生の転機もポストを得るコツも稼ぎのある配偶者を得ることかも知れません。

ポストを得るのにアピール効果が大きいのは、学会発表や論文、教歴といった王道以外だと、ウェブサイトであると信じています。「ホームページはカラーの放送局」であり、「オリジナルなページがどれだけ蓄積されるか」が重要です。ここで「かっこ」に入っているのは、2001 年に書いた「地方博物館のホームページ展開戦略」で指摘したことだからです。とりあえずは Researchmap でもいいですが、できれば何でも掲載可能な自分のサイトを作るとよいでしょう。自分がサイトを作ったのは役場を辞めたタイミングでした。所属が無く、自分を自分で証明しなければならなかったのも、何でも晒しており、それを現在まで維持し続けています。「ヨーロッパの博物館めぐり」というページを作っていて、ヨーロッパの主要な自然史博物館の名前で検索すると上位、ピットリバース博物館とかブルーハーフェ博物館などマイナーな博物館で検索した場合はトップに来ます。学芸員養成課程のオリジナルテキストも「博物館概論 テキスト」などで検索すると複数科目でトップに来ます。ブログは放置で日読者 30-60 名、ツイッターのビューは 100 名超くらい。少ない数ですが無いよりはまし。ニッチな分野だと効果が高いのではないのでしょうか（写真 2）。

## アカデミアに残る／残らないと決断した理由

自分の場合は在野からアカデミアに来たことになります。なぜそうしたかという、知床国立公園の環境省施設のうち、羅臼ビジターセンター、ウトロの世界遺産センター、ルサフィールドハウスの3施設は展示会社の協力会社＝下請けとして、コーディネートや資料収集、ライターとして関わったのですが、それがおもしろくなかったからです。すぐにできそうな仕事がつまらなかった。それでもなかには、展示会社と町の間に立ち、町の意向を環境省に伝えて実現を後押しする良い事後感が得られた仕事もありました。具体的には、羅臼ビジターセンターのシャチの全身骨格の展示です。通常、ビジターセンターは剥製などの死体は置かないし、雄のシャチの全身骨格は想定外の大型資料でした。それでも町の意向を環境省が飲んでくれ、全身骨格の展示が実現しました。ところが、そううまくいくことばかりではなく、こちらの提案がことごとく却下されることもありました。ライター仕事の下請けでは、全体デザインを知ることができないという立場でつまらないこともありました。

専門職員不在のまま制作される展示施設は、結局は展示会社の作品で、展示資料の選択も文章の表現も、展示会社の指示の範囲に従うことになります。さらに、展示会社も好き勝手にできるわけではなく、発注者や担当者である環境省の意見意向に従って選択していきます。下請け仕事はそれなりの金額にはなるけれど、既知の事柄を整形配置して作品を作るより、未知の事実を明らかにして使える情報を増やすことの方が自分の仕事とするには価値があると思ったのが、アカデミアに来た理由です。

それと学芸員養成課程の仕事は本気でやっています。法定科目だから、授業があるから購入される教科書ではなく、現役の学芸員が参照するに値あるテキストを書く、そんなつもりでやっています。

## 現在の目標、これからやってみたいこと

ライフワークにしようと思っていることは、日本による旧外地の野生生物研究や状況把握の歴史をまとめることです。関連する記録や文献は農業や林業、河川開発、水産などで相当数存在しますが、それらは資源や産物の視点で描かれています。それらを利用して、野生生物の状態の復元、当時のさまざまな立場からの自然の状態への認識を明らかにしたいと思っています。これら

## 3. Taxonomic Groupings Above the Species Level

### Cetacea—Whales, dolphins, and porpoises

The 90 living species (one extinct) currently grouped in the Cetacea (either an order or taxon below order—see above about the status of Cetacea) are divided into two groups—Odontoceti (toothed whales) and Mysticeti (baleen whales). All representatives of a third group, Archaeoceti (ancient whales), are extinct. It is generally agreed that cetaceans are the most derived of all mammals (with the possible exception of bats). Evolved from terrestrial ancestors, they have largely adapted to living in the water, and have no need to come ashore, even for resting or reproduction. All cetaceans share a similar general body plan: a streamlined (albeit some more-so than others) spindle-shaped torso; flattened paddle-like foreflippers; telescoped skull; nasal openings on top (rather than on the front) of the head; dense (pachyostotic) ear bones, a well-developed blubber layer; internal reproductive organs; newly-derived boneless structures in the form of tail flukes and a dorsal fin or ridge (secondarily lost in some species); and the loss of such aquatic hindrances as hind limbs (present, if at all, only as vestiges), external ear flaps, and fur (although all have hair at some time during their early development and some retain a few rostral hairs for life).



Marine mammal taxonomy is not fully settled by any means. Revisions take place regularly, and new species are still being discovered. These beaked whales, previously thought to be *Baird's*, are now in the process of being described as a new species. North Pacific. PHOTO: D. NAGASHIMA

In this chapter, we provide a brief overview of the higher-level (above species) classification and taxonomic groupings of marine mammals. It should be noted that marine mammal taxonomy is somewhat controversial and is constantly in a state of flux. We are actually in a splitting phase now, so there are more species in this edition than in the first edition. So, rather than trying to present the “flavor of the month” and having that perhaps be out-of-date when the user actually reads it, we have instead favored a more classic and conservative system of classification.

For example, a new phylogenetic classification published in 2005, and based on multiple lines of evidence, suggested some changes in ranking of various taxa. It considered the cetaceans (whales, dolphins, and porpoises) to be part of a more inclusive Order Cetartiodactyla (which would include hippopotamuses, among other artiodactyls). In such a classification, the suborders Mysticeti and Odontoceti might be demoted to infraorders (taxa below the level of suborder). The Society for Marine Mammalogy's Committee on Taxonomy has adopted this basic plan, with some modifications. In their recent list (Committee on Taxonomy 2014), cetaceans are listed in the Order Cetartiodactyla, but Cetacea is listed as an unranked taxon (as are Odontoceti, Mysticeti, and Pinnipedia). It is mentioned in a footnote that, “many marine mammalogists and paleontologists favor retention of Order Cetacea in the interest of taxonomic stability.” We tend to be in the latter category. Although it is confusing having so many unranked (but nonetheless valid) taxa, we do note that the current information from molecular studies supports a system that unites the cetaceans and other cetartiodactyls into a single taxonomic order. Clearly, there is much more work to do in marine mammal taxonomy!

Whether this arrangement will be accepted and supported by future work remains to be seen, although it currently appears to be well supported by genetic and morphological data and is gaining favor. However, for now, in the species accounts we will present the major higher-level groupings without their rankings, to avoid controversy and confusion.

写真 2. Marine Mammals of the World に掲載されたクロチツクジラの写真(右下). 2012–2013年に作った学生グループが、「あばしりネイチャークルーズ」の小型船チパシリで観察し、撮影した。斜里町立知床博物館研究報告に掲載され、1年ほどしてこの写真を使いたいと Robert Pitman と Thomas Jefferson からメールが来た。業績的には「その他」であってもネットにあれば次につながる。

の資料の大半は日本語で記され、日本とその周辺に保存されています。世界的に見るとこの分野の東アジアの情報が不足しており、言語的な能力や責任から日本人がまとめるべき内容と考えます。捕鯨やべっ甲など四足動物の利用に関して、世界史的な位置付けをしていくこともそうです。現状では、どちらも幻想の伝統文化と日本スゴイ論に埋もれている。必要な資料は、国内はもちろん、アメリカ人やノルウェー人、スウェーデン人が撮影した写真や記録も使えます。世界を股に掛けた資料収集による地方研究とまとめましょう。

### キャリアパスに悩める勇魚人へのメッセージ

こんなことを言ったら怒られそうですが、自分は研究者になりたいと思ったことは一度もありません。自然保護や現在の言葉でいう生物多様性を保全する行政やシンクタンク、そうでなければそれを伝えるジャーナリストになりたいと思っていました。生き物の調査は趣味でやっていこうと。

悩める人への伝言は、可能ならば趣味でも OK ということです。ですが、大掛かりな実験や費用が掛かる調査や研究を志向するなら職業とするしかないわけで、その見極めが大切だと思います。それと、仕事となると不得手なこともしたり、嫌いな人とも付き合うので成長しますね。上司の命令と言いついて聞かせて、個人では決してしないことをすることもできる。職業倫理は個人的良心を超える利他行為を生むこともある。そう考えると研究を仕事にすることが良いようにも思えます。他方、研究職を得たが産業向けの行政研究だと飽き足らないかも知れません。理想は職業研究者となり、やりたいことが可能な所属組織に変えていくことでしょう。

アマチュア研究者といっても海生哺乳類だとやり方は限られますが、限定された範囲の専門家としてなら実現可能な気がします。長期間の野外観察は困難でしょうから、試料採集の後の部分を担当するとか、論文執筆を請け負うなど。その際、論文を書かせてもらうために研究生などの立場でお金を支払うのか、逆に論文執筆の手数料をいただくのか。フォトグラメトリなどのデータ化は進むでしょうから、データ生成に特化するとか、職業研究者ではない形で研究に関わる方法が生まれているのではないのでしょうか。



写真 3. 北海道の某所にて。シーカヤックは素晴らしい。



写真 4. 50 代後半にしてスキーに目覚めてしまった。きっかけは YouTube.